

週刊建設ニュース 714

4月第4週/'76

■作品／善導寺文化会館

■論評／語られだした中国建築……………村瀬淳一郎

■ろんだん／建築士の試験はこれでいいのか……………近藤正一

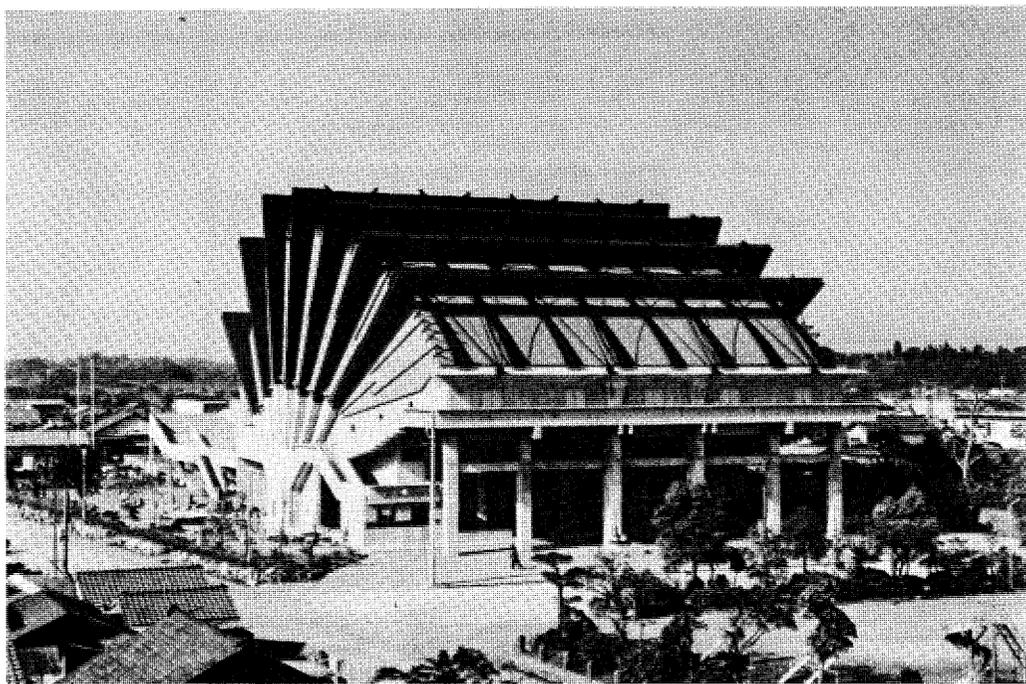
■現代建築再訪「傷だらけの市民会館」(その2)……………阿部成治

■シリーズ／シルクロード1万キロに行く(14)……………岡野忠幸

■建設資材価格速報

■全国の建設工事（巻末）

新シリーズ 建設オピニオン「私の航跡」 第四回 玉川陽太郎



IV

都城市民会館のもうひとつの大きなテ

ーラの「空気・光・音の統一」をみてみよう。音についての我々の測定はうまくいかなかったので、鹿児島大学の環境工学研究室の残響時間測定報告書に依ることとする。これによると、低音域において残響時間の座席位置による差が大きいことと、鳴き竜現象らしいものが生じたことが問題点として指摘されている。

この原因は、多分、オーディトリアムの平面形が矩形で、しかも側壁がモルタル塗りで拡散板もない点にあるのだろう。しかも、座席が固いため、観客の入りで音の状況が大きく変化すると思われる。

しかし、オーデの断面形と天井の材質の選択が良く、ワンスロープ方式であるので、一定の音は保証されている。現在はまだ音響の良くないホールが多いので、あまり不満も出ず、かえって満足する人も多いが、将来は問題が出るかもしれない。なお、もし音響を改善するために改造するとすると、それは設計者の考えていたメタボリズム範囲を大きく逸脱するものとなるだろう。

光は、竣工当時は今よりも幾分かは明るかったそうである。だが、当然のことながら、時と共に光を反射する壁・天井がよごれ、暗くなった。緞帳が下りている状況で、座席上三〇cmの水平面照度を測定したところ、驚くべき結果が得られた。JISの照度基準では、劇場の観客席は七〇〜一五〇ルクスとされているの

に対し、ここは最高で三〇ルクス強、平均二〇ルクス、客席の後方は五ルクス前後である。何という暗さであり、不均一さであろうか。パンフレットを読んだりメモをとる必要がある時に苦情が出るのも当然である。とても人間的環境とは言えない。

なお、ロビーやピロティ照度が不足している。こちらは、当初あまり暗かったので、ライトをとり替えたそうである。だが、内装がコンクリート打放しであるし、ライトの数もふやしく、まだ照度不足である。オーデの照明も、やりかえるのは少し面倒である。メタボリズムは、むしろこちらで発揮されるべきではなかったのだろうか。いや、完工当初から問題だったのだから、メタボリズム以前の問題なのかもしれないが。

最後が空気である。実は、プロセニアムの脇からのノズル吹出方式は、設備を担当した井上研究室の強い反対を受けた。しかし、設計チームはこれを無視したため、やむなく彼も後になって設計に協力した、という。会館側の説明によると、冷房はいいが暖房はボイラーの容量が少なく暖たまらない、かといってボイラーを増設しようにもその余地がない、とのことだった。しかし、私は、ボイラー容量にも問題はあるだろうが、設計時に問題となったノズル吹出方式にも暖房が効かない原因があるのではないか、と考えた。ノズルはプロセニアムの上方に口をあけている。冷気は重い

現代建築再訪

傷だらけの市民会館

(その2)

阿部成治

で客席まで下りてくるが、暖気は軽いので天井近くに停滞し、更に天井の隙間を通過して広い天井裏へと抜ける。ボイラーがすぐ冷えるのは、暖気の停滞を避けるためにその吹出速度を速くしているからだ、という仮説をたてた。残念ながら、暖房の季節まで待てないので、冷房の調査で代用することにした。

図2に、オーデの中央における高さの差(前号参照)による気温の変化を示した。冷房開始前には高さによる気温差はほとんど認められなかったが、冷房が始まると、ノズルより高位置にあるD点と、より下にあるB、C点との温度差が開いてしまった。なお、A点は床上70cmの位置なので、開場による観客の影響を受けて気温が上がっている。また、A点に座っていると、冷気が背中側から来るのははっきりとわかった。つまり、冷気はホールを対流しているのである。多分、暖房に関して私がたてた仮説は、正しいであろう。

菊竹氏は言う、「窓を見るがよい、そこから光が射しこみ、空気が流れこみ、小鳥のさえずりも聞えてこよう。(中略)本来、自然において、空気と光と音は統一されたものであり、一つの調和と秩序をもったものであった。」しかし、自然の尊重とは「人工の窓」をつくるという自然のアナロジーではなく、自然のもつ法則性の尊重である。その法則性を生かすために、人工物が自然と異なる形態をとらざるをえない場合も多い。それは

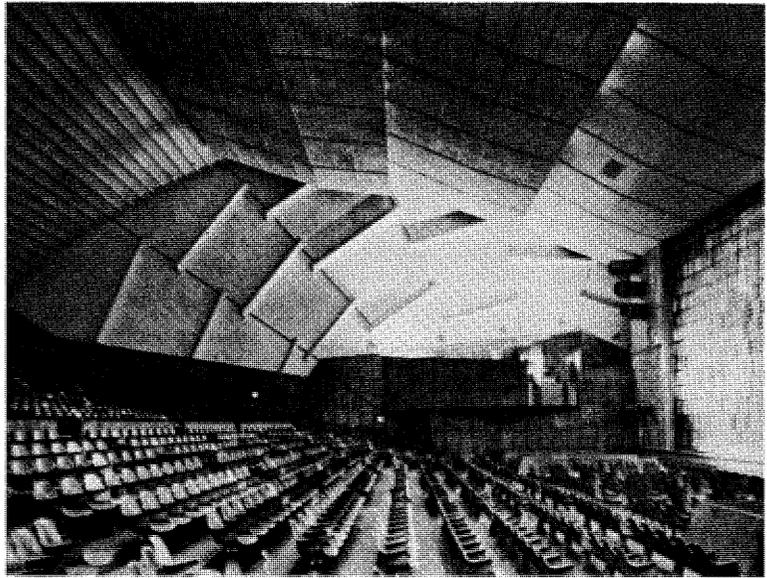
「伝統的形態が、新しい形態を生み出すのではなく、伝統的精神が、新しい形態をささえる」と同じである。たとえば、生物の足は、回転運動でなくて往復運動をする。しかし、その人工化は車輪という回転足により、初めて可能となった。両者の共通の基礎は、大地と足の間の摩擦力であろう。

光と音という、直線的に進み壁で反射するもの(但し、その反射率は光と音では違う)と、空気という、主に対流で伝わるものとのを、設置システムで一致させることは、現在の技術水準では無謀であり、人間的な自然から遠ざかる行為だといえよう。もちろん、より小さな空間に対しては、この方法が有効に作用することもあるだろうが、オーディトリウムではまだまだ無理である。

むしろ、設備の統一は、メタボリズムを基本にして行なわれるべきではなかったのだろうか。設備装置こそは、建築の中で最も老化、進化が早く、取り替えを必要とするため、それが可能、かつ簡単でなければならぬ。三井霞ヶ関ビルで壁掛式洋風大便器が採用されたのも、このためである。しかし、都城市民会館は、設備類のメタリズムを拒否するか、多大の改造のうえでしか許さない。これは、実に「反メタボリズムの建築」である。

V

傷だらけの市民会館、都城市民会館は、果して俗か、それとも反俗か。傷はどこまで達しているのだろうか。それは



は、なぜ生じたのだろうか。
 都城市民会館は、菊竹清訓氏の設計論
 の実験であった。「変る部分と残る部分」
 「空気・光・音の統一」を市民会館に適
 用した初の作品だった。しかし、都城市
 民会館では、変化が必要な部分はそれが
 不可能か非常に困難かで、しっかりして
 ほしい部分が「変る部分」として計画さ

れている。空気・光・音は、いずれも満
 足できるものではない。つまり、彼の実
 験は失敗に終わったのである。しかし、そ
 れはなぜであろうか。
 一般に、実験の失敗の原因は、その実
 験のもととなった理論か、その理論の適
 用のミスに求められる。私には、彼の考
 えそのものが誤っているとは思えなかつ

た。実際、建築には老化しやすく取り替
 えの必要な「変る部分」があり、メタボ
 リズムが行なわれている。また、空気・
 光・音を、人間的自然的構築のために一
 致さずというのも、間違っていないと思う。
 従って、問題はこのテーマを市民会館と
 いう建築に適用する過程で生じた、と考
 えられる。

私は、これまで菊竹氏の設計方法論で
 ある「か・かた・かたち」論に触れるの
 を避けてきた。それは、設計する者は誰
 でも（か・かた・かたち）の環をめぐっ
 ているのだ、彼はこの無意識の過程をと
 り出して理論化したただけだ、と思えたか
 らである。しかし、都城市民会館の傷つ
 いた原因がその理論の適用にあるらし
 い、とわかった時、私は、彼の設計方法
 論をもう一度考えてみたい誘惑にかられ
 た。そして、気になる点を見出した。

それは、「か」は構想的段階、「かた」
 は技術的段階、「かたち」は形態的段階
 で設計は「か」から「かた」、そして「か
 たち」へと進む、割り切られている点で
 ある。もちろん、彼自身、フィードバッ
 クを認めているし、三者の弁証法的発展
 についても述べている。しかし、人はそ
 の言動によってでなく、行為によって判
 断されねばならない。都城市民会館に見
 出されるものは、か↓かた↓かたち、の
 性急な一方通行でしかない。残る部分は
 客席、変る部分は屋根と決めつけ、老化
 や進化がどのように生じるか、当初の設
 計を補う改造はどこで考えられるか、は

検討されていない。また、プロセニアマ
 の脇に集中された空気・光・音のシステ
 ムで、十分な環境が実現されるか、の検
 討も不十分である。

こう考えると、私には「か・かた・か
 たち」論は、あの奇抜な形をつくり出し、
 正当化するための「口実」として使われ
 たのではないか、という気さえた。当
 初の設計案は、与えられた条件を素直に
 示すものだったが、その「デザインが停
 滞」したために、更なる追求が行なわれ
 た。そして、メタボリズムと諸設備の統
 一という方向で、やっとう光明が見出せた、
 という。そこでは、「か・かた・かたち」
 論は、「構想がよいからいののだ」とい
 う、設計の十分な検討を拓否し、一方通
 行を肯定する理論となってしまうた。

こうして実験は失敗に終わったのであ
 る。

VI

では、「反俗」とは、いったいどのよ
 うな建築のことをいうのであろうか。私
 は必死になって、自分の眼で見たり写真
 で見たりした、有名な建築のことを考え
 てみた。そして、不思議な点を見出した。
 それは、ここ数年内に建ったものは別と
 して、私が有名作品に接する時に受ける
 印象が二つある点だった。印象の第一
 は、その建築の「うまさ」である。さす
 がに有名なものは、ということを感じる
 のである。しかし、第二に感じるのは、
 意外にもその「通俗さ」「ありきたりさ」
 であった。それで、何か他の建築とは違

うものを期待していた私は、むしろ失望を感じるのである。これはいったい何を意味するのだろうか。

この疑問に対する答えらしきものが見つかったのは、西ドイツのシュツツガルトのワイゼンホーフを訪ねた時のことだ。思いあたった時である。ワイゼンホーフは、一九二七年にドイツ工作連盟が住宅展示会のためにつくった小団地で、近代建築の発展に重要な貢献をしたものである。現在も昔のままの姿を留めているのは数戸にすぎないが、当時の状況を偲ぶのはさほど困難ではない。

私は、ある秋の日にひとりでこのワイゼンホーフを訪ねた。やっとたどり着いた時には、少しガッカリした。期待していたほどではなかったからである。しかし、これも建設当初の姿と違うかもしれない、と思い、じっくり歩いてみることにした。そして、裏側のミースが設計したアパートを見つけて、ほっとした。白い色が美しく、プロポーシジョンがとても良いのである。「うまい」と思った。

それから一〜二カ月してから、私は知りあいの韓国人と一緒に、再びワイゼンホーフを訪ねることにした。彼は、ドイツの設計事務所でも働いたこともあるのに、シュツツガルトにワイゼンホーフがあることを知らなかったのである。私は、得意になって、ワイゼンホーフ、特にミースのアパートを紹介した。もちろん、私は、彼の口から「すばらしい」という言葉が出ると思っていた。ところが、

が、彼は私の期待をあまりにも見事に裏切ってしまったのである。「たいしたことではない」と彼は言った。なおも私が自説を主張しようとすると、彼は「このアパートは単調すぎる。今はこんな設計ではなく、建物をずらしたりして、単調さを避けようとする。」と言った。私には、それ以上反論することはできなかった。なぜなら、彼の言うとおりだったからである。この団地の全体計画にしても、現在の西ドイツの水準と比べると、少し低いようにも思えた。

私は、後で、戦前のたまたまを残している街を歩きながら、彼は歴史というものを考えなかったからあのようなことが言えたのだと考えて納得することにした。確かに今ではあのワイゼンホーフはいい団地とは言えない。しかし、建設当時は唯一のものであり、当時の建築常識への反乱だったのだ。当時のドイツの一般の建物とワイゼンホーフとの間には、何と大きな隔たりがあるのだろうか。そういう眼で見ないと、あのワイゼンホーフは理解できないのだ、と私は自分に言いかけた。

そうだ、ある建築の良さ、大胆さは、その建築が建てられた当時を考えてみないと理解できないのだ。建築関連分野の発展により、機能的、形態的、あるいは構造的に矛盾を持つに至った場合は、矛盾のない解決を目指して多様な試みが行なわれるようになる。その多くは失敗するであろうが、やがては独創的な解決が

見出されるに違いない。そして、その解決が独創的で大胆であればあるほど、それは他の人によって何らかの形で模倣されていき、やがてはどこにでも見られるようになるのである。つまり、正しい反俗はやがては俗に転化し、そうすることによって自らを建築学の歴史に刻み込むのである。ただ、その作品のうまさだけはそのまま残り、見る人にそれと感じさせる。しかし、重要なのは、その「うまさ」よりも、むしろ「建築当時の反俗性」の方なのである。

都城市民会館においては、既存の市民会館のデザインを越えることができなかったため、設計理論を口実にして、あの奇抜な形がつくられた。そこに現われ^た形は、矛盾だらけのものであったが、それ故に誰も模倣しようとはしなかった。即ち、都城市民会館は、既に建築界によって否定されたのである。その結果、この建築は「永遠反俗」の如く見えるのである。

都城市民会館は、建築家の陥り易い「反俗への誘惑」を、素直に示してくれる。同時に俗と反俗について多くのことを教えてくれる。私は、この建築の作者である菊竹清訓氏に、この建築を否定することを頼みたい、と思う。そのことによって、都城市民会館は、建築家のパペルの塔として、永遠に建築家の胸に生き続けるであろう。

これは、『建築文化』誌が1975年に「俗あるいは反俗について」というテーマで募集した懸賞論文に、「俗か反俗か：傷だらけの市民会館」というタイトルで応募したものを基礎としています。審査評の最後に「別の機会に発表の場を」と書かれていた審査委員長の近江榮氏（日本大学教授、故人）にお願いして、週刊建設ニュースに掲載していただくことができました。なお、ル・コルビュジエの住宅2棟（世界遺産）やミースの集合住宅が建つワイゼンホーフに関する部分は、週刊建設ニュースへの掲載にあたって追加したものです。